反天皇制運動
Alert
5号
［通巻 387 号］
2016 年
11 月 8 日発行
第Ⅹ期・反天皇制運動連絡会

駐文科大臣は、2016 年 3 月 29 日、「朝鮮学校に係る補助金交付に関する留意点について（通知）」を朝鮮学校を認可している 28 都道府県知事にあて発出した。

この通知は、「朝鮮学校に係る補助金交付については、……法令に基づき、各地方公共団体の判断と責任において、実施されているところです」としながら、「朝鮮学校に関しては、我が国政府としては、北朝鮮と密接な関係を有する団体である朝鮮総聯が、その教育を重要視し、教育内容、人事及び財政に影響を及ぼしているものと認識しております」として、「朝鮮学校に通う子供に与える影響にも十分に配慮しつつ、朝鮮学校に係る補助金の公益性、教育振興上の効果等に関する十分な御検討とともに、補助金の趣旨・目的に沿った適正かつ透明性のある執行の確保及び補助金の趣旨・目的に関する住民への情報提供の適切な実施をお願いします」とするものである。

そして、8 月、文科省はこの「通知」の実施状況を報告するよう各自治体に「依頼」した。9 月 27 日の産経新聞は早速「朝鮮学校補助金　3 県保留　文科省通知で歯止め」という記事を出している。文科大臣は各自治体の上に立つ存在ではない。しかし、この「通知」によって補助金削減・廃止等の差別が誘発される危険がある。あたかも地方自治体に対する国の不当な優越を説いた 9 月 16 日の福岡高裁那覇支部判決のように。

「高校無償化」からの朝鮮学校排除、そして住民が築き上げてきた自治体による朝鮮学校への補助金に対する牽制は創立 70 年を迎える朝鮮学校の歴史の中で 3 度目の朝鮮学校弾圧である。そこには日本の果たされていない植民地責任、朝鮮への差別、蔑視が現れている。　（ぐずら）

今月の Alert ◉「有識者会議」の討論を検証し、批判の声をあげよう！――＊2
反天ジャーナル ◉――捨て猫、なかもりけいこ、大橋にゃお子＊3
状況批評 ◉ 象徴天皇制は「裸の王様」――山口正紀＊4
ネットワーク ◉ 暮らしの中の沖縄――本土に住む私たちの責任――古荘斗糸子＊7
ネットワーク ◉ 軍拡予算を批判する討論集会への参加を！――池田五律＊8
太田昌国のみたび夢は夜ひらく〈78〉
◉ コロンビアの和平合意の一時的挫折が示唆するもの――太田昌国＊9
マスコミじかけの天皇制〈05〉 ◉ なぜか天皇による違憲行為が「護憲〈平和主義〉天皇」の「お気持ち」として賛美される倒錯した〈構造〉――天野恵一＊10
野次馬日誌――＊11　**集会の真相**――＊13　**反天日誌**――＊16　**集会情報**――＊16

250 円
●定期購読をお願いします（送料共年間４０００円）
●郵便振替 00140-4-131988 落合ボックス
東京都千代田区神田淡路町 1-21-7 静和ビル 2A　淡路町事務所気付　落合ボックス
TEL/FAX 03-3254-5460　URL http://hanten-2.blogspot.jp/　mail: hanten@ten-no.net

今月の Alert

「有識者会議」の討論を検証し、批判の声をあげよう！

八月八日の天皇の「生前退位」の意向を表明するビデオメッセージを受け「有識者会議」が設置された。正式には「天皇の公務の負担軽減等に関する有識者会議」。その初会合が一〇月一七日に、そして二七日に第二回会合が開かれた。繰り返しになるが、この「有識者会議」が天皇自身のビデオメッセージを受けて設置されたことは自明であり、それによって退位の制度化に向けて政治が動きだしたということを否定する者はいないだろう。これは明らかに、憲法四条に反して天皇が「国政に関する権能を有し」たことであり、違憲行為である。

だから、その指摘を回避するために、二ヶ月以上経過しての初会合の日程が設定され、名称に「生前退位」の語句を挿入しないという配慮がなされたという。聴取項目が八つ設けられ、天皇の役割、天皇の国事行為や公務のあり方、負担軽減の方法、摂政を置く是非、国事行為を委任することの是非を検討した上で、後半に、天皇の退位の是非の議論を持ってくるという順番にも考慮がされたという。

座長の今井敬経団連名誉会長は記者会見で、「天皇のご発言とは切り離して考えていく」と強調し、「生前退位」についても「まったく予断なく議論する」と発言している。明らかな天皇の違憲行為が言及されることなく、「配慮」されるものへと変質している。

有識者会議が年末までに専門家からヒアリングを行い、来年初めに「論点」を公表し、来春には「提言」を取りまとめ、それを受け政府が関連法案を提出。そして一八年一月の天皇即位三〇年に向かうという流れを政府は目指しているらしい。オリンピックまでに新天皇即位の流れが着々と準備されている。

そして、この有識者会議の議論は非公開でなされ、議事録は発言者の名前を伏せ概要のみが公開されるという。

その理由は「静かな環境で、率直に自由な意見交換をするため」ということらしいが、議論は公開されるべきであるし、議事録はすべて記録されるべきだということは大前提として、ちょっと深読みしたくなるフレーズである。発言によっては右翼の大音量の街宣車が押し掛けたり、発言した内容によっては、身の危険を感じる事態になる危惧が想定されているのかしらと。

まあ、意見聴取者一六人のメンバーの名前をみる限り、そんな心配は無用で天皇制ありきが大前提の議論で終始することは明らかだが。

そもそも天皇制は権威秩序と治安維持法等による補強政策によって、支えられてきたという歴史がある。天皇に対する敬慕といわれているものは、市井の人々から自然発生的に表れたとはいいきれないだろう。「神聖ニシテ侵スヘカラス」という帝国憲法の規定によって、弾圧に伴う暴力によって強要され、批判を許さない体制の中で維持されてきた。天皇制批判は常に身の、いや命の危険を伴う暴力と隣あわせにあった。敗戦後、国民主権によって天皇は象徴になったが、マスコミ報道の過剰な敬語使い一つを例にとっても、相変わらず「神聖ニシテ～」の精神が醸成され続けている。

非公開について政治学者の白井聡は東京新聞で、天皇の「お言葉」とのくい違いを指摘する以下のコメントをしている。「天皇のメッセージの本質は国民の皆さんに考えてくださいということ。自分がこうしたいということではなく、より広く、天皇とは何か、国民統合の象徴とは何かを議論してほしいという趣旨だった。会議の密室性は『お言葉』と逆行する――。」と。

密室性の問題が主権者側の知る権利の不利益ではなく、天皇の意向に沿わないからよろしくないというものだ。憲法に規定されている国民主権の原則を問われる発言といえる。民主主義と天皇制の矛盾を問うどころか、天皇制が憲法に規定された制度であるという原則さえもなく、あまりにもやすやすと天皇発言に乗っかっている。護憲派天皇対極右安倍政権という図式は、結局、天皇制国家というナショナリズムに取り込まれるという危惧が、今回の天皇メッセージを巡る状況で露呈し確認されたような言論で溢れている。

憲法で謳われている人民主権の原理が、運動側においてさえ崩壊しつつあるように思う。この危機的状況下、私たちは天皇のビデオメッセージの語句を丁寧に検証し、批判の声を具体的にあげていく。恒例の12・23の集会を楽しみに！

（鰐沢桃子）

反天ジャーナル

東京が占領される日々

九月一七日配信の「デモクラシーNOW」でオリンピック批判の著書を出した二人のジャーナリストの対話を見て驚いた。リオ・オリンピックのセキュリティはイスラエルの軍事企業二社に丸投げしていたが、その売り込み文句が、ガザと西岸でパレスチナ人抑圧の実績だったというのだ。無人機を飛ばし、通信を傍受し、その気になればいつでも攻撃にかかれる監視体制が、そのままリオ全体を覆っていたことになる。日本企業NECなどはその共犯者として、テレビCMまでうっているではないか。この間の東京オリンピック費用をめぐる報道でも、現状推進派は、「テロ対策費こそいくらかかるかわからない」と言葉を切る。地上も海上もガチガチに封鎖されているガザは、屋根のない刑務所と呼ばれているが、そんな状況を作った占領者に払う警備費用がこれまた青天井とは、洒落にならない下品な話だ。

この春に誕生したローマ初の女性市長は、選挙公約通り、オリンピック招致レースへの参加をやめた。理由は単純で、市民に膨大な財政負担（レガシー）を残さないためだ。医療や教育からどれほどの金を横取りすることになるのか、レガシーと言い募るさもしい奴らは、自分の言葉に負の値札をかけてみろ。（捨て猫）

「共謀罪」名称を変えて再浮上

安倍政権は参院選で2／3の議席を得た事で我が意を得たとばかりに、二〇二〇年のオリンピックやテロ対策として、これまで三度も廃案になった共謀罪を「テロ等組織犯罪準備罪」と名称を変え、来年の通常国会で成立させるという。共謀罪は国際組織犯罪防止条約を批准するための法整備として二〇〇三年小泉政権の時に提出されたが、市民の強い反対の声で二〇〇六年廃案となっている。

そもそも国際組織犯罪防止条約はマフィアなど組織犯罪対策が目的でテロ対策とは無関係だという。名称を変え新共謀罪法案だというが、「話し合うだけで罪になる」要素は全く変わっていない。適用対象を「組織的犯罪集団」とし合意だけでなく「準備行為」を加え要件を付けたというが、対処犯罪は六〇〇以上で、二人以上で組織とし、その判断は捜査当局が行なうというから、警察は盗聴法改悪に続き、また捜査権限を手に入れることになる。廃案になる前、小泉首相（当時）の「国民の一大関心事になっている、強行採決は好ましくない」との判断で裁決が見送られている。戦争準備体制に迷いなく突き進む安倍政権と比べ小泉政権の方がまだマシだったとは皮肉なものだ。監視国家を描いた「1984（ジョージ・オウエル）」の世界が現実化する。（なかもりけいこ）

嗚呼、越後の闘い

一〇月一六日の新潟県知事選では劇的な結果を叩きだした。私は越後長岡市出身なので、今までとは違う流れのこの選挙にはとても注目していた。とはいえ、米山氏が勝つとは正直、思ってはいなかった。いまだに「田中角栄神話」の生きる保守地域だからだ。

先ず長岡市だが、自・公の推薦を受けた元・長岡市長の森民夫氏が（地の利のおかげか）制した。その差約一万票。僅差ではあるが、有権者数二三万三〇二人に対し投票数一三万四二四二人なので真の分析は難しい。

泉田前知事の出身地、加茂市では米山氏の方が倍以上を獲得した。加茂の小池市長は防衛庁出身ながら護憲派で、泉田氏とは高校OBの仲。それも功を奏したようだ。流石だったのは新潟市西蒲区。「平成」の大合併で消滅してしまったが、ここにはかつて「原発を退けた」巻町という町があった。あれから二〇年経った今でも住民パワーは健在で頼もしい限りである。

と、このように米山氏が（僅差とはいえ）制したかに見えるが、原発を有する柏崎市は約三〇〇〇票、刈羽村では約六〇〇票、森氏の方が上回っていた。そして……自民→維新→民新と鞍替えをしてきた米山氏、この先〝仲井真〟になるか〝翁長〟になるか……、わからないのだ。（大橋にゃお子）

状況批評
思想・状況・批評

象徴天皇制は「裸の王様」

「生前退位」論議のタブー

山口正紀（ジャーナリスト、「人権と報道・連絡会」世話人）

七月一三日のＮＨＫ「スクープ」に始まり、八月八日の「ビデオメッセージ」放送、一〇月一七日の「有識者会議」初会合と、「天皇生前退位」をめぐるマスメディアの大騒ぎが続いている。

「天皇」という言葉がこれほどメディアを賑わすのは、一九八八・九年の「裕仁Ｘデー」騒動以来だろう。その点で、この生前退位騒動は「明仁Ｘデー」の始まりと考えていいと思う。

この間、新聞などのバカ騒ぎを不快な気持ちで眺めていて、ふと思い出したのが、アンデルセン童話の名作『裸の王様』だ。

「バカな人には透明で見えない布」で作ったという、ありもしない「王様の新しい服」。これを側近や大臣たちは、「美しい」「お似合いです」と口々に褒め称える。王は自分には見えない服を、さも着ているかのようなふりをし、パレードする。沿道の人々も「王様の服」が見えるふりをして、「よくお似合いだこと」などと称賛するので、「今までこれほど評判のいい服はありません」ということになる。ところが、小さな子どもが突然、「でも、王様、裸だよ」と王に向かって言う。実は、王もそう思っていたのだが、今さらパレードをやめるわけにもいかず、もったいぶって歩き続ける……。（大久保ゆう訳、ネット「青空文庫」から要約）

敗戦後ひねり出され、現在に至る「象徴天皇制」は、この実体のない「裸の王様の新しい服」そのものではないだろうか。

天皇生前退位をめぐって、「右派」神道・伝統主義から、「中立的」大手メディア、憲法学者、「左派」リベラルまで、さまざまな立場から、多種多様な「国民的議論」が繰り広げられている。

今のところ、首相安倍晋三を含む伝統主義右翼は概して生前退位の制度化（皇室典範の改正）に否定的なのに対し、大手メディアとそれに誘導される世論、左派リベラルの間では生前退位に理解を示す意見・主張が多い。左派の中には、これを「護憲主義天皇の反安倍改憲メッセージ」とまで持ち上げる人までいる。

また、生前退位を求める天皇明仁のメッセージ、それによる生前退位の法制度化を憲法違反と考えるかどうか、についても右派・左派が複雑に入り乱れ、錯綜した様相を見せている。

メディア上のこうした議論に関する個々の評価は措き、私が一連の論議を眺めていて、ごくシンプルに疑問に思うことがある。

新聞・雑誌に掲載された、ほぼすべての意見・主張が、「象徴天皇制及びその存続」を自明のごとく扱い、それに疑問や異論を差し挟むことを、はなから排除していること。例えば、リベラルとされる『東京新聞』八月九日付社説は、《未来につながる天皇制に》との見出しで、《天皇制永続のための改革にも踏み込むべきときだ》などと書いた。なぜ、こんなことが言えるのか。

「シンプルな疑問」をもっと単純化しよう。生前退位をめぐる「大人たちの議論」を聞いた一〇歳の子どもがもし、「天皇て、どうしてそんなに特別えらいの？ 人間はみんな生まれつき平等なんでしょ？」と尋ねたら、大学教授、評論家など立派な肩書きを持つ左右の論者たちは、いったいどう説明するだろうか。

神道主義・伝統主義右派は、まさに「日本の伝統だから」と論理もなく決めつけるのだろう。それが大日本帝国官僚の創作であろうと、「男系男子の継承による万世一系の連綿たる尊い血筋」などと「精子主義」を振りかざすだろう。この屁理屈をカムフラージュするのに、さまざまな神話、伝承を持ち出すことだろう。

「でも、そんな血筋がなんでえらいの？」と子どもは訊く。「ウチだって代々続いてきたから、僕が生まれてきたんでしょ？」

ところが、『東京新聞』さえ、《万世一系の天皇家が千五百年、あるいは二千七百年にわたって統治者であり続けた歴史は世界に類がない》（前記社説）と誇る。しかし、統治者とは支配者・権力者だ。人民を支配することが、そんなに誇るべきことなのか。

では、「中立的立場」で天皇・皇族に無条件の敬語を使うメディアや、差別に反対のはずの左派リベラルは、どのように一〇歳の子どもの疑問に答えるだろうか。これはもう千差万別だろう。「敗戦後、日本国憲法が天皇を〈日本国の象徴であり、日本国民統合の象徴〉と決めたから」とか、「昭和天皇は戦争責任を問われかけたが、今の天皇は夫婦そろって護憲の平和主義者だから」とかなんとか。これもまた、何の説得力ももたない。日本国憲法で身分を保障された天皇明仁が「護憲派」になるのは、当たり前だ。

もし天皇明仁に同様の質問をぶつけたら、彼はどう答えるだろうか。「あなたはなぜ自分をえらいと思っているの？」「日本の象徴なんてえらそうな役割を、なぜ引き受けられるの？」

その答を聞く前にもう一つ、私には天皇明仁にぜひとも聞いてみたいことがある。「実際のところ、あなたは父・天皇裕仁が遂行した〈先の戦争〉のことをどう思っているのか」――。

天皇裕仁は、大元帥として中国侵略以来のアジア太平洋戦争を領導し、アジア各国で死者二〇〇〇万人以上に及ぶ甚大な被害をもたらした。すでに敗戦が決定的となった一九四五年に入っても、「国体護持のため」に戦争を継続させた。そのために、東京大空襲をはじめとする全国各地の空襲被害、沖縄戦、そしてヒロシマ・ナガサキと、取り返しのつかない重大な惨禍を引き起こした。

そのことを明仁さん、あなたはどう思っているのですか。

天皇裕仁は、日本を占領した米国の対ソ戦略の思惑・都合で、東京裁判の被告人候補者名簿から外された。もしあの時、つまり東京裁判が始まる直前の一九四六年二月、マッカーサーの主導で「象徴天皇制」を含む「憲法改正草案」が作られていなければ、天皇裕仁は確実にA級戦犯として訴追されていたはずだ。

そうなれば、裕仁の戦争犯罪・戦争責任はもとより、天皇制も侵略戦争推進システムとして徹底的に追及されたに違いない。天皇制は廃止され、共和制が施行された可能性も大いにある。

連合国が明仁の誕生日の一九四八年一二月二三日にA級戦犯七人の処刑を執行したのは、その重大な危機を裕仁と明仁に思い知らせ、親子二人の胸に刻み込ませるためだったのではないか。

こうして、天皇裕仁の戦争犯罪・戦争責任が不問に付され、「象徴天皇制」が作られたこと、さらに自ら戦争責任を取ろうとせず、「言葉のあや」「文学方面のこと」としてすませた無責任な父親について、明仁さん、あなたは今、どう思っているのですか。

天皇明仁は、リベラルからも「平和主義者」と評価される。だが、上記・裕仁の戦争責任について、これまで一言も語ったことはない。学者も評論家もメディアも天皇裕仁の戦争責任を追及してこなかったし、今回の生前退位をめぐる議論でも、そうした根源的な問いは完全に封印され、タブーとなっている。

私は天皇明仁を「戦犯の息子」と思っている。「責任をとらず、うまく立ち回った戦犯の息子」「父親の責任に口を閉ざし、戦地を訪ねて責任を果たしているふりをする、ずるい息子」――。

天皇明仁はこれまで、憲法が規定する国事行為以外に自ら「象徴としての行為」と称し、戦地訪問、被災地慰問、諸外国訪問、外国賓客との面会、「終戦記念日」など各種行事への出席を続けてきた。それに疲れ、「そろそろ交代したい」というのが、生前退位だろう。だが、憲法はそもそもそんな「象徴的行為」を規定していない。「国民の総意」で、そんなことを頼んだこともない。

結局、天皇の「公的行為」ないし「象徴としての行為」なるものは、「象徴天皇制」を存続させるための宣伝に過ぎない。ビデオメッセージの中で、天皇明仁はこんなことを言っている。

「伝統の継承者として、これを守り続ける責任に深く思いを致し、更に日々新たなる日本と世界の中にあって、日本の皇室が、いかに伝統を現代に生かし、いきいきとして社会に内在し、人々の期待に応えていくかを考えつつ、今日に至っています」

日本国憲法に、こんな「伝統」のことは一言も書かれていない。そんな「伝統」に言及しているのは、自民党の改憲草案だ。

「日本国は、長い歴史と固有の文化を持ち、国民統合の象徴である天皇を戴く国家であって、国民主権の下、立法、行政及び司法の三権分立に基づいて統治される。（中略）日本国民は、良き伝統と我々の国家を末永く子孫に継承するため、ここに、この憲法を制定する」（自民党・日本国憲法改正草案前文）

天皇明仁は好々爺の顔をして、なかなかの策略家だ。ノー天気な左派リベラルに「安倍改憲に反対」と思わせて「象徴天皇制」を永続させ、自民党改憲草案に近づける生前退位アピール……。

「裸の王様」に、こんなシーンがあった。役人たちみんなが「立派な布でしょう?」と褒める布が、王には何も見えない。

《王様は自分がバカかもしれないと思うと、だんだん怖くなってきました。また、王様にふさわしくないかと考えると、恐ろしくもなってきました。王様のいちばん恐れていたことでした。王さまが王様でなくなるなんて、耐えられなかったのです》

「見えない布」＝象徴天皇制を見えるようにする。そうして皇室を存続させる。それが自分の仕事だと思ってやってきたが、もう疲れた――これが天皇明仁の生前退位のホンネではないか。

ぬとふーく NETWORK

暮らしの中の沖縄――本土に住む私たちの責任

古荘斗糸子（うちなんちゅの怒りとともに！三多摩市民の会）

会が発足して二一年。会の規模もメンバーもすっかり変わってしまいました。長年の間に、会が一層盛り上がるということは、まずありえないのに、それでもなお続けている私たちに「会の報告を書け」と言われるのは厳しいのですが、安倍政権の暴走を前にして、一度立ち止まって整理してみる機会だと受け止めてみようと思います。

安倍政権の暴走は、沖縄の人々の人権・平和・地方自治を全く踏みにじっています。それは、早晩、本土の私たちにもかかってくる問題だという認識があまりにも希薄です。私たちは、日野市議会に「請願」を出し続けてきました。内容は「地位協定の見直し」「オスプレイの配備撤回」等々です。不採択を主張する議員の議論は、「国の専権事項だから」「テーマは地方議会になじまない」「政府はしっかり取り組んでいる」等々。まるで政府見解の口移しです。このような議員を選んだ世論に対してどう働きかけたら良いか、深刻です。ネットが普及した昨今、多くの人々は自分の意見を自由に言えるようになったように見えます。しかし政策に反する意見がますます言いにくくなっていることも現実です。参政権の一つである「請願権」を行使し、議会を傍聴し、個々の議員の活動をチェックする活動が必要だと感じています。

私が沖縄に関わり始めたきっかけは、私の郷里の近くにある六ヶ所村の核燃問題でした。ここが核のゴミ捨て場になると知った時の驚きと怒りは私の生活を変えました。地方に迷惑施設を押しつけて、都会にいて「安全」で「豊か」に暮らしている人たちへの怒りは、大半の人たちの無関心への怒りでした。でも自分が揺さぶられるまでは、私も同じ無関心の一人でした。

地方に迷惑施設を押しつける言い訳に差別感覚が働きます。高江で大阪府警の機動隊員が発した「土人」、「シナ人」発言、そしてその機動隊員への、松井大阪府知事のねぎらい発言「出張ご苦労様」は許しがたい。でも、ここまでいかなくても「お金をもらって基地を（あるいは原発を）受け入れているんでしょ」というたぐいの感覚は決して少数ではありません。

一九九五年九月、沖縄で起きた少女レイプ事件に対する沖縄の怒りが、本土の私たちを揺さぶりました。一〇月、日野市の仲間たちと一緒に政府交渉（総理府、防衛庁《当時》、外務省）を行ない、一二月、日野市議会に政府への意見書を出す「陳情」を提出（この時は全会一致で採択された）し、それまで沖縄を知らなかった罪深さを痛感し、一九九六年一月、会を発足しました。「沖縄に関わることは足元の問題にも取り組むこと」が、発足時確認したことでした。当事者の位置に自分を置いて感じる現地主義をできる限り取りたいと思い、立川・横田ツアー、北富士ツアーなどを企画しました。

会の「通信」は、沖縄・基地問題の他、原発、教育問題、環境問題、地域の問題などを取り上げてきました。多くの人々との接点を持ちたいと思い、ドキュメンタリー映画上映会をし、駅前で情宣をし、市議会に「請願」を出し、市議会を傍聴するなどの活動も、数年前からは地域で「日野市の今と未来を考える会」として取り組むようになりました。

二〇〇九年、政権交代があって鳩山元首相が「少なくとも県外」と言ったことで、チラシの中の辺野古にフリガナをつけなくても良くなりました。またオール沖縄が本土の世論を突き動かし、辺野古・高江に取り組むグループ（とりわけ若い層）がたくさんできました。原発問題でも、圧倒的少数派の時代からは、ずいぶん広がったと感じます。一方で政府の強権を許しているのは、沖縄の実像に対する世論の無理解であり、辺野古・高江について広く伝えていくことは急務だと痛感しています。新垣毅さん（琉球新報）の「沖縄に米軍基地が集中している状況は、本土の皆さんの責任だ。たとえ反対運動している人でも責任がある」（「沖縄の怒りとともに」98号に講演記録を掲載 申込先T/F 042-592-3806）という指摘に、私たちもどう応えていくべきか。正念場でもあります。

ねとわーく NETWORK

軍拡予算を批判する討論集会への参加を！

池田五律（有事立法・治安弾圧を許すな！北部集会実行委員会実行委員会）

「許すな！軍拡予算　肥らせるな！軍需産業作るな！米軍・自衛隊基地　12・3討論学習集会」を、私たちは開催する。「私たち」とは、「有事立法・治安弾圧を許すな！北部集会実行員会」、「立川自衛隊監視テント村」、「パトリオットミサイルはいらない！習志野基地行動実行員会」の三者である。「私たち」三者は、それぞれの地域での取り組みに際して、支援協力を積みかさねてきた。昨年の安保法制整備に際しては、「基地の街から戦争法にNOの声をあげよう」と、銀座デモを行った。また、それぞれの基地の増強状況からしても軍拡予算は許せないと、二〇一六年度防衛予算を批判する防衛省への申し入れ行動を二度に渡って行った。こうした昨年来の取り組みを踏まえて、二〇一七年度防衛予算を批判していきたい。その第一弾が、今回の「討論学習集会」である。

二〇一七年度の「防衛予算概算要求」は、五兆一千億円と「大軍拡予算」と言われた前年度を二四％も上回る。一隻七六〇億円の潜水艦など、高額装備を次々と購入しようとしている。F－35Aも六機購入予定だ。

「私たち」の目の前にある基地に関連する要求項目も多い。

習志野や入間には、迎撃ミサイルPAC－3が配備されているが、その改修費が要求されている。木更津では米海兵隊と自衛隊のオスプレイ修繕基地化が進められているが、自衛隊オスプレイの購入費も、防衛省は要求している。横田基地や入間基地に関することで言うと、超大型輸送機C－2も三機購入されようとしている。

高額装備の陰で目立たないが、問題の多い要求項目も多い。

「統合機動力の強化」に関する予算も目につく。それは、機動戦闘車の購入といった装備面だけではない。陸上自衛隊を総隊制に移行し、その司令部を朝霞に設置するための予算も要求されている。

「衛生機能強化」に関する予算も注目しておく必要がある。入間に新自衛隊病院が建設されつつあるが、福岡病院も拡充されようとしているし、沖縄での拠点病院建設の検討も費目に上がっている。さらに気になるのは、「第一線救護」の「教育器材の購入」である。「第一線救護」、即ち戦場で衛生兵が医療措置を行う訓練のための教材を購入するというのだ。戦傷者が増えることを前提とした態勢整備が着々と進められようとしているのだ。

これらを眺めていくと、目の前の基地の増強につながるというだけでなく、もっと総合的な視点から、軍拡予算を批判していかなければならないと痛感させられる。例えば、宇宙関連経費一二八九億円が要求されている。こうしたものを批判する上では、軍需産業との関わりの分析が不可欠になるだろう。先に触れた潜水艦などは輸出を画策しているものでもある。その点で言えば、武器輸出との関連も忘れるわけにはいかない。

沖縄というアングルからの分析も不可欠だ。その一つは、宮古や石垣での自衛隊の増強に関する予算である。それだけでなく、例えば地対艦ミサイルの増強といったものも沖縄と深く関わっている。宮古水道を通過する中国艦船を宮古島に配備した地対艦ミサイルで撃つといったシナリオが想定されるからだ。「離島防衛対処」のためといった理由で要求されている多くのものは、同様に、沖縄およびその周辺空海域での自衛隊増強予算と言ってもいいのかもしれない。これらに米軍再編経費などを加えると、沖縄関連の防衛予算は莫大な額に上るだろう。

こうしたことから、「12・3討論学習集会」では、以下の四つの問題提起を受けて進めることとした。

①「主要項目を切る」　吉沢弘志（習志野）
②「主要項目以外の注目点」　池田五律（北部）
③「軍需産業と武器輸出の観点から」　杉原浩司（武器輸出反対ネットワーク）
④「沖縄関連予算批判」　中村利也（辺野古への基地建設を許さない実行委員会）

以上の問題提起を受けた後の討論を経て、防衛省への申し入れ行動など、今後の取り組みを考えていきたい。

12月3日18時、文京区民センター3Cに、是非おいでいただきたい。

太田昌国の みたび 夢は夜ひらく78

コロンビアの和平合意の一時的挫折が示唆するもの

国際報道で気になることがあると、BSの「世界のニュース」を見たり、インターネットで検索したりする。今年九月から一〇月にかけての、南米コロンビア報道はなかなかに興味深かった。五〇年もの間続いた内戦に終止符を打ち、政府と武装ゲリラ組織との間に和平合意が成る直前の情勢が報道されていたからである。ゲリラ・キャンプが公開されて、各国の報道陣が入った。ゲリラ兵士の家族の訪問も許された。名もなきゲリラ兵士が「これからは銃を持たずに社会を変えたい」と語っていた。幅広い年齢層の女性の姿が、けっこう目立った。FARC（コロンビア革命軍）には女性メンバーが多いという報道が裏付けられた。「戦争が終わるのを前に、FARCがウッドストックを開催」というニュースでは、ゲリラ兵士が次々と野外ステージに立っては歌をうたい、さながらコンサート会場と化した。平和の到来を心から喜ぶ姿が、あちこちにあった。

キューバ革命の勝利に刺激を受けて一九六四年に結成されたFARCは、闘争が長引くにつれて初心を忘れ、麻薬の生産や密売で資金を稼いだりもしていた。彼らによる殺害、誘拐、強制移住の犠牲者は民間人にまで広がり、数も多かった。それでもなお、若いメンバーの加入が途絶えることがなかったのは、絶対的な貧困が社会を覆い、働く者の手に土地がなかったからである。九月二六日に行われた和平合意文書への署名式で、ゲリラ指導者は「我々がもたらしたすべての痛みについてお詫びする」と語った。対するサントス大統領にしても、前政権の国防相として行った苛烈なゲリラ壊滅作戦では事態が解決できなかったからこそ、大統領就任後の二〇一二年以降、キューバ政府の仲介を得ての和平交渉に臨んできたのだろう。

私が注目したのは、和平合意の内容である。FARCは政党として政治参加が認められ、二〇一八年から八年間、上・下院で各五議席が配分される。犯罪行為を認めた革命軍兵士の罪は軽減される（八年の勤労奉仕）。FARCの側でも、土地、牧場、麻薬密輸や誘拐・恐喝で得た資金の洗浄に利用した建設会社などすべての資産を、内戦の犠牲者への賠償基金として提供する。合意成立後一八〇日以内にすべての武器を国連監視団に引き渡す――などである。

中立的な立場からして、政府は大きくゲリラ側に譲歩したかに見える。ここに私は、政治家としてのサントス大統領の資質を見る。同国を長年苦しめてきた悲劇的な内戦を終結させるためには、この程度の「譲歩と妥協」が必要だと考えたのだろう。歴代政府とて、そしてそれを支える暴力装置としての国軍や警察とて、無実ではない――そう思えばこその妥協点がそこにあったのだろう。サントスはブルジョア政治家には違いないが、こういう態度こそが、あるべき「政治」の姿だと思える。

サントスは、政治家としての責任感から、人びとより「先」を見ていた。果たして、合意から一週間後に行われた国民投票で、和平合意は否決された。投票率は低く、僅差でもあったから、この結果が「民意」を正確に反映しているかどうかは微妙なところだ。だが、「ゲリラへの譲歩」に納得できないと考える被害者感情が国民投票では勝ったのだ。

教訓的である。アパルトヘイトを廃絶した南アフリカの一九九〇年代半ば、従来のように報復によってではなく、真実の究明→加害者の謝罪→犠牲者の赦し→そして和解へと至るという、画期的な政治・社会過程をたどる試みがなされた。南アフリカにおいても、加害者にあまりに「寛大な」方法だとの批判は絶えずあった。それでも、その後、かつて独裁・暴力支配などの辛い体験をしたさまざまな国・地域で、同じような取り組みがなされて、現在に至っている。コロンビアの人びとが、この重大な局面での試練に堪えて、和平のためのヨリよき道を見出すことを、心から願う。

日本社会も応用問題を抱えている。南北朝鮮との「和平合意」をいかに実現するかという形で「慰安婦問題」や拉致問題の解決がいまだにできないのは、過去の捉え返しと、それに基づく対話がないからである。責任は相互的だが、「加害国」日本のそれがヨリ大きいことは自明のことだ。コロンビアの和平合意の過程と、その一時的挫折は、世界の他の抗争／紛争地域に深い示唆を与えてくれている。（一一月五日記）

マスコミじかけの天皇制 05

なぜか天皇による違憲行為が「護憲〈平和主義〉天皇」の「お気持ち」として賛美される倒錯した〈構造〉

――〈壊憲天皇明仁〉その3

天野恵一

一〇月八日・九日、東京では「山岡強一虐殺30年 山さん、プレセンテ!」の集まり、私が当然にも参加するべき集まりの日、私は北海道（札幌）にいた。山さんが天皇主義右翼暴力団に殺されてから、もう三〇年もたっているのだ。私は、この集まりの準備のプロセスで持たれた、山さんたちがつくった山谷のドキュメント映画の連続上映会の第一回目の発言者として、今年の一月一六日に、「天皇制の変容」というテーマで話をした。私はそこで、山谷日雇労働者の支援活動をともにしていた佐藤満夫がドキュメンタリーフィルムのカメラをまわしだして殺され、山さんがそれをひきついで映画を完成させた直後に、また殺されるという、すこぶるショッキングな事態から話しだした。

私は、その時、「昭和天皇Xデーおよびその準備と対決」するためにつくりだした私たち反天皇制運動連絡会は、この二つの死体、右翼に虐殺された二つの死体を眼前にしながら「反昭和Xデー」闘争に突入していったという事実をなまなましく想起せざるえなかった。強烈な決意を持って、すさまじいハッキリとした政治的攻撃であるXデー攻撃を闘い抜く。

平成代替わり（Xデー）状況は、すでに始まっている。右翼の暴力は日常化している。しかし、それは「昭和」のXデー状況とは、すっかり様変わりしている。この〈変容〉の意味をつきつめて考えることが、現在の反天皇制運動にとって、もっとも大切な事ではないか。「昭和Xデー」はアキヒト天皇の天皇としての登場の政治舞台であった。「即位」とともに彼は明白な憲法違反（二〇条政教分離原則を踏みにじる）神道儀礼の中で「護憲」発言をして、その天皇としての活動をスタートした。〈違憲〉の儀式の中でのその「護憲」発言。マスコミは、それが違憲セレモニーであることをまったくふれず、「護憲」発言だけを、ひたすらクローズアップして賛美してみせた。「天皇メッセージ」で開始された「平成代替わり」の政治プロセス。どういう政治的攻撃かがボンヤリしている今の状況。しかしそれはすでに、このスタートの時点で、同じ構造が露出していたのである。天皇が明白に違憲のメッセージを発しながら、政治（宮内庁官僚）・マスコミは基本的にその大問題を無視し、「平和を祈る」象徴の積極的活動を讃え、高齢での重い「公務」活動にひたすら同情し、「生前退位」へのルール変更をいそげとキャンペーンするだけである。この「構造」がつくりだすだろう政治と、どう対決していくのか。

八日の「さよなら原発北海道集会（「千万人アクション北海道実」主催）を九日の「泊原発阻止現地集会」（「泊原発再稼働阻止実」主催）などの行動への参加と、両日の行動のあき時間に設定された「再稼働阻止全国ネットワーク」主催の全国相談会。泊原発だけではなく、各地の非常に緻密かつ地道な住民あるいは自治体への働きかけが力強くレポートされ、運動の体験が生き生きと交流される。この相談会の東京側の司会者であった私は、再稼働されてしまった地域でこそさらに力強く運動が持続されている状況（たとえば鹿児島では反原発知事がうまれた）、どこも再稼働Xデー決戦主義に終わっていない状況のリアルなレポートに励まされる思いであった。

しかし、この北海道行動全体を通して、始まっている「平成天皇代替わり」の政治状況をめぐっての話題がほとんどなかったことが、ひどく気になった。

〈3・11原発震災〉直後の天皇の「ビデオメッセージ」と今回の「ビデオメッセージ」。天皇、皇族の被災者（地）めぐりの政治。反原発運動とクロスして考えなければならない天皇政治は、私たちからすれば山盛りである。しかし、交流会レベルでの話題、一般情勢についての議論でも、こうした事は、ほとんど話題にされなかった。課題が別だから、ある意味ではあたりまえ（外から天皇課題を強引に持こむ政治主義は、私たちはすべきではない）とはいえ、昭和天皇Xデー状況の時は、どういう課題に取り組んでいるグループも、天皇問題にふれずにすまないといった状況が現出した。この点も決定的に変容している。運動課題間を（その連関を具体的に明らかにしながら）つないでいく、主体的な努力が私たちに要請されているのだ。

もちろん、各地で「平成代替わり」の政治と対決する小さな集まりが、いくつもつくりだされていることは、私も、今、実感できる（呼ばれる会、自分たちのつくった集会も増えている）。しかし、〈護憲平和主義〉天皇のこぞって賛美される〈違憲行為〉という「構造的」な力がフルに発揮されている状況。その「平成代替わり」の政治プロセスと安倍政権の明文改憲の政治プロセスのリアルな再開という政治状況が重ねられている状況に、今私たちはいる。この点に自覚的でなければなるまい。そして、安倍政権とアキヒト天皇は、天皇の拡大された「公務」をスッキリと合憲化したい（あわよくば皇室祭祀まで含めて）という改憲コースでは、ほぼ共同歩調である点を忘れずに。

一野次馬日誌

10月1日～10月31日

【10月1日】

明仁、美智子◆岩手県北上市の北上総合運動公園陸上競技場で総合開会式が行われた第71回国民体育大会「２０１６希望郷いわて国体」に出席。

徳仁、雅子◆徳仁、雅子が東京都千代田区の国立劇場を訪れる。

「**生前退位**」◆明仁の生前退位を巡り、臨時国会での議論が始まる。

【10月2日】

明仁、美智子◆盛岡市で国体の体操競技を観戦。盛岡発の東北新幹線で帰京。

【10月4日】

徳仁◆カタールの王族で、タミム首長のいとこに当たるハマドと東京・元赤坂にある東宮御所で会見。

「**生前退位**」◆民進党が常任幹事会で、明仁の生前退位について党内で議論する「皇位検討委員会」を野田佳彦・幹事長の下に設置し、委員長に長浜博行・副代表を起用することを決める。

【10月5日】

徳仁◆東京都渋谷区の新国立劇場を訪れ、ドイツの作曲家リヒャルト・ワーグナーのオペラ「ワルキューレ」を鑑賞。

「**生前退位**」◆民進党の野田佳彦・幹事長が、明仁の生前退位の法整備を巡り、政府案の対案として皇室典範「改正」案を国会提出することに消極的な姿勢を示す。

【10月7日】

徳仁◆全国育樹祭の式典に出席するため、京都府を訪問。

雅子、愛子◆宮内庁の小田野展丈・東宮大夫が記者会見で、愛子が疲れによる体調不良のため、9月26日から学習院女子中等科への登校を控えていると明らかに。

「**生前退位**」◆政府が閣議で、明仁の生前退位を可能にする法整備について、皇室典範の「改正」によらず、特別法の制定でも可能とする答弁書を決定。

【10月8日】

徳仁◆人工知能やロボットの技術の開発に取り組む京都府精華町の研究施設を視察。

【10月9日】

徳仁◆京都府南丹市の「府民の森ひよし」で開かれた第40回全国育樹祭に出席。

【10月10日】

「**生前退位**」◆政府が、明仁の生前退位を巡る法整備で、退位後の明仁の呼称を法案に明記する方向で検討に入った、退位後も皇族として新たな「身位（身分・地位）」を位置付けると報道。

【10月11日】

天皇、皇族◆明仁、美智子が、「国賓」として訪日したベルギーのフィリップ国王夫妻を歓迎する宮中晩さん会を、皇居・宮殿の「豊明殿」で開催。

秋篠宮、紀子◆岩手県北上市の北上総合運動公園陸上競技場で行われた第71回国民体育大会「２０１６希望郷いわて国体」の閉会式に出席。

【10月12日】

明仁、美智子◆「国賓」として訪日したベルギーのフィリップ国王夫妻に伝統芸能や工芸を案内するためとして、東北新幹線と車を乗り継いで茨城県結城市を日帰りで訪れ、結城市民情報センターで地元に伝わる神楽や結城紬の機織りの実演などを国王夫妻と見学。

美智子◆東京都豊島区の東京芸術劇場を訪れる。

【10月13日】

天皇、皇族◆「国賓」として訪日しているベルギーのフィリップ国王夫妻が主催するコンサートが東京都千代田区の紀尾井ホールで開かれ、明仁、美智子が出席。徳仁、雅子や秋篠宮、紀子と眞子、佳子が出席。

【10月14日】

明仁、美智子◆宮内庁が、タイのプミポン国王の死去を受け、明仁、美智子が13日夜から3日間の喪に服していると発表。

徳仁◆山梨県を日帰りで訪れ、「三分一湧水」を視察。

愛子◆宮内庁の小田野展丈・東宮大夫が記者会見で、学習院女子中等科3年の愛子が、疲れによる体調不良で、当週も学校を欠席したと明らかに。

天皇制◆政府が明仁の生前退位を巡り、翌年の通常国会で与野党の議論を求める方向で調整に入った。

【10月17日】

美智子◆東京都港区のサントリーホールで「ル・ポン国際音楽祭 赤穂・姫路２０１６」の10周年記念東京特別公演を鑑賞。

「**生前退位**」◆政府が、明仁の生前退位を巡る有識者会議の初会合を官邸で開く。座長に互選された今井敬・経団連名誉会長が専門家から意見聴取する項目案として、女性・女系天皇の容認や「女性宮家」創設は議題に含まれないとの認識を記者団に示す。

【10月18日】

明仁、美智子◆東京都港区のホテル「グランドハイアット東京」を訪れ、恵まれない子どもを支援する国際ＮＧＯ「セーブ・ザ・チルドレン・ジャパン」の創立30周年を記念するチャリティーディナーに出席。

「**生前退位**」◆宮内庁関係者によると、明仁は12年に心臓の冠動脈バイパス手術を受けてまもない段階で、周囲に「平成30年までは頑張る」と話していたと報道。

【10月19日】

明仁◆訪日しているブラジルのテメル大統領と皇居・御所で会見。

徳仁、雅子◆宮内庁が、徳仁、雅子が全国農業担い手サミットの開会式出席を検討していると発表。

有識者会議◆菅義偉・官房長官が衆院内閣委員会で、明仁の生前退位を巡る有識者会議の提言を踏まえた法案について「できれば（翌年の）通常国会に出したいという思いは持っている」。法整備に関し「内閣として国会に法案を提出する」。「できれば円満に早くと考えている」。「女性宮家」創設や女性・女系天皇を対象外とす

る意向を示す。民進党の安住淳・代表代行が記者会見で「天皇陛下の負担軽減や退位に限らず、皇室制度がこの先も続いていくために解決すべき問題がある」と述べ、女性宮家創設を含む皇室制度全般の議論を求める。共産党の穀田恵二・国対委員長が会見で「特別法ではなく、典範を変える必要がある」。日本のこころを大切にする党の中野正志・幹事長が会見で「皇室典範や皇室制度の在り方まで議論すれば、半年や1年では終わらない。天皇陛下の意向を尊重すれば、特別法というのは現実的だ」。

【10月20日】

天皇、皇族◆美智子の誕生日で、皇居の御所や宮殿に、徳仁、雅子ら皇族や安倍晋三首相をはじめとする閣僚が次々に訪れ、祝賀行事が行われる。

明仁、美智子◆宮内庁が、明仁、美智子が11月16日から2泊3日の日程で、長野、愛知両県を訪問すると発表。

美智子◆82歳の誕生日で、宮内記者会の質問に文書で回答し、明仁がビデオで生前退位の実現に強い思いを示したことについて「謹んでこれを承りました」と初めて感想を公にするとともに、新聞で「生前退位」の大きな活字に触れた際の心境を「衝撃は大きなものでした」「一瞬驚きとともに痛みを覚えたのかもしれません」と述べたと報道。

徳仁、雅子◆宮内庁東宮職が、全国障害者スポーツ大会の開会式出席などのため、徳仁、雅子が21日から2泊3日で予定していた岩手県訪問について、雅子の同行を取りやめると発表。

天皇制◆明仁の生前退位を巡る有識者会議で、座長代理に就任した東大の御厨貴・名誉教授が共同通信のインタビューに応じ、政府が想定する2018年の退位に向けて「間に合うようにしなければ、というスピード感はある」と述べ、早期の法整備が必要との考えを示す。明仁一代に限る特別法の制定について「（選択肢として）あると思う」。明仁が8月のビデオメッセージの冒頭で「2年後には、平成30（2018）年を迎えます」と表明したことについて「はっきりと言っているわけではないが、陛下自身が在位を自分で区切った」。過去の政権が皇室制度を巡り、女性・女系天皇や「女性宮家」創設を検討した経過に触れて「十数年、何一つ実っていない。穴を開けないことには先に進まず、今回は第1段階の整理だ」。退位を含む負担軽減策の検討が会議の目的だとして、皇室典範の抜本的「改正」について「現段階では難しい」。政府が法整備の軸として検討している特別法に関し、個人的見解とした上で「特別法で解決するというのが（典範改正よりも）条件整備が楽だろう」。会議での議論が現行憲法下で規定された象徴天皇制の転機になるとの認識を示し、明仁が退位の意向をにじませたビデオメッセージを公表した事態を「一種の国の危機だ」と表現。

「生前退位」◆超党派の保守系議員でつくる「日本会議国会議員懇談会」が、明仁の生前退位を巡り、国会内で勉強会を開く。自民党や日本維新の会などから約20人が出席。作家竹田恒泰を講師に。

【10月21日】

明仁、美智子◆皇居・御所で国際オリンピック委員会のバッハ会長と面会。

徳仁◆全国障害者スポーツ大会の開会式出席などのため、2泊3日の日程で岩手県入り。県庁で達増拓也知事から東日本大震災の復興状況などを聴く。

眞子◆有田焼誕生400年を祝う記念式典に出席するため、佐賀県を訪れる。

「生前退位」◆民進党の枝野幸男・憲法調査会長が共同通信のインタビューで、明仁の生前退位を巡る法整備に関し「全会一致でやるべきだ」として超党派の議員立法で対応するのが望ましいと強調。天皇の地位が「国民の総意」に基づくとの憲法を踏まえ「国会が主導権を取るべきテーマで、国会に議論を委ねれば、野党も含め責任を共有する。政府提出の法案にこだわるべきではない」。

【10月22日】

徳仁◆岩手県北上市にある北上総合運動公園陸上競技場で、第16回全国障害者スポーツ大会の開会式に出席。

眞子◆有田焼の創業400年を祝い、佐賀県有田町で開かれた記念式典に出席。

【10月23日】

明仁、美智子◆第40回国際外科学会世界総会の開会式出席などのため、東海道新幹線で京都市入り。

徳仁◆岩手県で、世界遺産の平泉町の中尊寺と毛越寺を見学。これに先立ち、一関市で全国障害者スポーツ大会のバスケットボールの試合を観戦。夜、帰京。

明仁・ドゥテルテ会見◆自民党の小野寺五典・元防衛相がフジテレビ番組で、25日に訪日するフィリピンのドゥテルテ大統領が明仁と会見する際の振る舞いに懸念を示す。「天皇陛下との会見時のしぐさで（2国間関係に）影響も出る。しっかりフィリピン側に伝えてほしい」。

【10月24日】

明仁、美智子◆京都市左京区の国立京都国際会館を訪れ、第40回国際外科学会世界総会の開会式に出席。

【10月25日】

明仁、美智子◆京都市の下鴨神社と上賀茂神社を「私的」に参拝。

明仁◆宮内庁が、明仁がタイのプミポン国王の死去に際し、ワチラロンコン皇太子に宛てて24日に弔電を送った、と発表。

愛子◆体調不良による学校欠席が1カ月に及ぶ。

「生前退位」◆政府が、定例で開いている中央府省庁の事務次官連絡会議に、宮内庁の西村泰彦次長を11月から出席させる方針を固め、明仁の生前退位を巡る法整備などに備え、府省庁間の意思疎通を図ると報道。

【10月26日】

明仁、美智子◆京都市の京都府立医科大を訪問し、眼科の最先端技術の研究を視察。午後、東海道新幹線で帰京。

【10月27日】

天皇、皇族◆宮内庁が、三笠宮死去に伴い、明仁が当日から7日間、美智子ら皇族が7～90日間喪に服すと発表。／宮内庁が、三笠宮死去を受けて、11月1日に

東京・元赤坂の赤坂御苑で予定していた秋の園遊会を取りやめると発表。当日夕に皇居・御所で予定されていた明仁とフィリピンのドゥテルテ大統領との会見が中止に。明仁、美智子が、27、28日に予定していた勤労奉仕団や新穀を供える神事、新嘗祭関係者との「ご会釈」を取りやめる。

明仁、美智子◆宮内庁の山本信一郎長官が記者会見で、明仁、美智子が朝に三笠宮が危篤になったとの連絡を受けた際、すぐに入院先の聖路加国際病院に駆けつけようとしていたと明らかに。

三笠宮死去◆昭和天皇の末弟で、明仁の叔父に当たる三笠宮が、入院先の東京都中央区の聖路加国際病院で心不全のため死去。明仁、美智子や徳仁、雅子ら皇族が、相次いで宮邸を弔問に訪れる。／安倍晋三首相が、皇居と、東京・元赤坂の赤坂御用地にある三笠宮邸をそれぞれ弔問し、記帳。赤坂御用地内の東宮御所、三笠宮東邸、高円宮邸を弔問。「ご訃報に接し、悲しみの念に堪えません。国民と共に慎んで心から哀悼の意を表します」とする謹話を発表。／大島理森・衆院議長と伊達忠一・参院議長が、それぞれ哀悼の意を表す謹話を発表。／最高裁の寺田逸郎長官が「1世紀にわたる長い激動の時代に常に皇室の支えであり、国民生活にもさまざまな形で寄り添ってこられた。皇族としての尊いお姿に、国民は深い敬愛の念を抱いていた。痛惜の思いを禁じ得ない」との謹話を発表。／宮内庁が、28日から当分の間、東京都港区の赤坂御用地内にある三笠宮邸に、一般向けの弔問記帳所を設けると発表。／宮内庁が、三笠宮の葬儀日程を発表。本葬に当たる「斂葬の儀」は11月4日午前10時から東京都文京区の豊島岡墓地で営まれると報道。

「生前退位」◆政府が、明仁の生前退位を巡る有識者会議（座長・今井敬・経団連名誉会長）の第2回会合を首相官邸で開く。

天皇制◆菅義偉・官房長官が記者会見で、三笠宮死去に伴う皇族減少への対応に関し「いたずらに検討を先延ばしにする問題ではない」。生前退位を巡る有識者会議で議題とすることに時間的な制約などを理由に重ねて否定的な考えを示す。

【10月28日】

天皇、皇族◆三笠宮死去を受け、東京都港区の赤坂御用地にある三笠宮邸で、納棺に当たる儀式「御舟入」が営まれたほか、一般向けの弔問記帳が始まる。妻百合子のほか、長男の故寛仁の長女彬子ら親族が参列。各皇族が別れをする儀式「拝訣」が行われ、徳仁、雅子や秋篠宮、紀子らが加わる。明仁、美智子は、慣例で御舟入に参列せず、これに先立って宮邸を弔問。本葬に当たる「斂葬の儀」は宮家の私的行事として神道形式で営まれるが、「国民」の弔意の対象となるため墓の建設費用とともに国費でまかなわれるのが通例だとして、閣議で了解される。

明仁、美智子◆「公式実務訪問」のため訪日中のヨルダンのアブドラ国王と、皇居・御所で共に昼食、懇談。

美智子◆宮内庁が、美智子が京都市滞在中の25日夕から持病の「頸椎症性神経根症」の症状が強まり、侍医の治療を受けていると明らかに。

【10月29日】

眞子◆鳥取県米子市で障害者の交流会に参加し、21日の同県中部地震の被災者と話す。三笠宮死去から7日間の服喪期間中だが、一時的に喪を外す「除喪」の手続きをして出席したと報道。

【10月30日】

眞子◆鳥取県米子市で開かれた障害者による芸術発表会「東京オリンピック・パラリンピックに向けた障がい者アートフェスタ2016」に出席。

天皇制◆明仁の生前退位を巡る有識者会議のメンバー、山内昌之・東大名誉教授（歴史学）が共同通信のインタビューに応じ「象徴天皇の務めの非常に大事な部分が地方訪問や被災地見舞いなどの公的行為だ」と述べ、天皇の「公務」軽減には専門家ヒアリングを経た多面的な検討が必要との認識を示したと報道。

【10月31日】

三笠宮死去◆宮内庁が、三笠宮死去を受けた一般向けの弔問記帳を、11月3日午後4時で終了すると発表。

「生前退位」◆政府が、明仁の生前退位を巡る有識者会議（座長・今井敬・経団連名誉会長）が11月に実施する専門家16人からの意見聴取の日程を発表。

集会の「眞相」

プレセンテ！ 山岡強一虐殺30年集会

「山岡強一虐殺30年 山さん、プレセンテ！」集会は一〇月八日、三河島の会場で、佐藤満夫、山岡強一両名の遺影を前に、『山谷――やられたらやりかえせ』の上映から始まった。

翌九日、隅田公園山谷堀広場に「野戦之月」の芝居テントが持ち込まれ、土砂降りの雨の中で会場が設営される。山さんが凶弾に倒れた時、彼の北海道時代の友人・米山将治は「かれが見据えた高く架空な月明かり／ぼくの書く〝野戦〟という一語はかれのためにある」と追悼詩を捧げている。その「野戦」のテントの中で集会が始まる。テーマは「労務者」と「国際主義」。具体的闘いとしての天皇主義右翼皇誠会―金町一家との闘いとそれを担った「徒党たち」。（詳しくは集会パンフ「山さん、プレセンテ！」をご覧ください。パンフは「山谷」上映委のHP http://www.sanyafilm.jpn.org/ を通して入手できます。）

午後三時からは共同炊事に合流する。野宿者、生保受給者が多く集まり、そこでメシを共にするが、集会を共にするまでには至っていない。それが現状だ、と言わざるを得ないだろう。再開された集会は「現場から」として、今や「侵略軍」と化した機動隊の厳しい弾圧と差別の中で闘う沖縄からのアピール。野宿者運動、

フリーター労組、不安定労働組合を担う三名から現状の運動と寄せ場労働運動との接点を探るトークがなされた。そのあとは「文化祭」と称して踊りと演奏で盛り上がり、最後は「インターナショナル」で締められる。

寄せ場での闘いとそこでの佐藤さん、山岡さんの戦死。『山谷――やられたらやりかえせ』に登場する仲間の多くもすでに亡くなっている。そうした中で残された者は自らの体験・経験をどう理論化し、それを歴史的に位置付け、現在に刺さるものとするか、内在化していた豊かさと狭さを提示していく必要がある。山谷、釜ヶ崎での闘いが、特異な場での特異な闘いではなく普遍性をもったものとしなければ、殺されていった仲間たちも浮かばれないであろう。遅ればせながらそうした歩みの前進として集会はもたれたと言える。

（実行会／R）

学習会・生前退位を考える 天皇は本当に護憲派なの？

一〇月一六日、茨城県つくば市の春日交流センターにて（この日の朝、政府は大嘗祭を二年後に行うことを検討中というニュースが流れたのを我々は知らなかった……）。配布資料として八月八日の「おことば」全文の他、この件をめぐる議論を網羅的に把握しようと、七・八月の新聞と週刊誌に載った論説をアンソロジーにしてみた――小堀桂一郎・小林よしのり・木村草太・小熊英二・横田耕一・伊藤晃・太田昌国・天野恵一という超豪華執筆陣で！何が問題とされているのか抽出し、本質的に問うべきは何なのかを考えることが狙いだった。参加者は一三名、八〇代から一〇代までが同席する珍しい、面白い場になった（前回Xデーで行動した人は半数ほど）。

始めに天皇ビデオメッセージを映写、次に資料の要旨を主催から簡単に説明し、それから自由討論に入ったが、途中の学生からの質問「今の天皇はよい人のように見えるのに、なぜ皆さんは天皇制に反対しているのか？」に、参加者全員が各々答えてゆくという展開になった。世代によって〈天皇制経験〉は大きく違っていることにも気づく。人権と民主主義に反する……税金泥棒……えらい人がいれば差別される人が出てくる……人間を人間とみなしていない不気味さ……「神」を一方的に押し付けられる不条理……戦時体制下での教育の記憶……無論理の論理の日本的精神構造……それらの答えの中でも、「マルクスだろうが天皇だろうが自分の上で威張る奴は許せない」と、「今回の報道に対する周囲の雰囲気がXデーの時と同じいたたまれない感じでとにかくイヤだ。だから今日は来た」という直情的な反応が、この場に集まったのは〈個人〉たちであることを端的に表出してくれていると思えた。個人として、我慢できない、イヤなものはイヤなのだ、という素朴な原動力を手放さず、それを言葉で形にしていく作業の必要性。

所期の目標到達には遠く時間切れになったが、運動の根本的動機に触れ、確認できたとは思う。今後は「連続学習会・象徴天皇制を考える」という総タイトルの下、〈退位／Xデー〉に向けて、隔月で問題を追及していく予定。

（戦時下の現在を考える講座／鈴木）

「生きる権利に国境はない！ 差別・排外主義を許すな！

一〇月一六日、「生きる権利に国境はない！差別・排外主義を許すな！一〇・一六ACTION」が一三〇人の参加で行われた。差別・排外主義に反対する連絡会の呼びかけで二〇一一年来、毎年秋に新宿職安通りを中心に続けてきたデモは今年で六回目になる。新宿・柏木公園の集会では、連絡会からの基調提起に続き、「『高校無償化』からの朝鮮学校排除に反対する連絡会」「『国連・人権勧告の実現を！』実行委員会」「全国『精神病』者集団の会員の方」「辺野古リレー」「DA直接行動」「反天皇制運動連絡会」より、連帯アピールをいただいた。

集会後、新宿駅西口―南口―靖国通り―職安通りをデモ。特に、職安通りのコリアン関係の店などには例年、事前にビラやリーフを持参して一軒一軒に当日のデモを伝えてきた。当日は、二か国語でコールを唱和すると、沿道の反応もとても好意的で、手を振る人や呼応してコールする人も目立つ。警察は一時期、ヘイトデモとの関係でこのエリアでのデモを控えろと圧力をかけてきたこともあったが、コースを変えることなく押し通し、地域の人達との信頼をつくってきた成果でもある。

差別・排外主義グループによるヘイトデモ・街宣は各地で続いている。七月の都知事選では、在特会の桜井がヘイトスピーチをまき散らし一一万四千余りの票を取った。相模原の障害者施設での四六人の殺傷事件も優生思想をもって殺人を正当化したヘイトクライムである。沖縄・高江での大阪府警機動隊員の差別暴言（「シナ人」「土人」）もヘイトの蔓延と差別意識の表れにほかならない。連絡会では一二月一一日（日曜）文京区民センター（2A）にて、差別・排外主義に反対するシンポジウムを開催する。提起は、ジャーナリストの安田浩一さん、弁護士の師岡康子さん、川崎市民ネットワーク、障害者団体の方々を予定。午後一時半開場 二時開始、五時過ぎから同会場で交流会あり。多くのご参加を。

（差別・排外主義に反対する連絡会／藤田）

アンダークラス 上等とは？

山岡さん虐殺三〇年に開催された「山さん、プレセンテ！」のアフタートークがフリーター労組事務所の会議室で開催された。フリーター労組では、昨年来「アンダークラス」をキーワードにして、かつての日雇い労働者の闘いである山谷の運動と、現在の水商売労働者の運動であるキャバクラユニオンの相互参照の試みを続けている。その一環として、「山さん、

プレセンテ！」実行委には組合からもメンバーが参加し、一方、組合で取り組む争議には同実行委からの参加を得てきた。アフタートークはそのひとつの集約点であった。

トークタイトルは「アンダークラス上等！――非正規労働者と戦争扇動」。差別によって不可視化され、いかなる政治勢力からも無視される階級としてのアンダークラス。眉を顰めることなしに語ることさえできない、まして自認することは憚られているこの階級の現実を見つめ、そこに開き直ることに展望を見出そうという企画だった。平井玄さんのコーディネートで、藤野裕子さん、栗原康さん、加藤直樹さんがスピーカーとして立った。

当日の議論は、栗原康さんの提起する「長渕剛」評価を軸に推移した。現代のアンダークラスの輪郭を捉えるにあたり、長渕の歌とそこに惹かれる人々（栗原さんもその一人である）を考える、という提起だった。しかし、議論の対象がアンダークラスの実態なのか、それともその論理なのかが整理されず（意図的かもしれないが）、議論は成熟しなかったように思う。米騒動から各地に飛び火した都市暴動の担い手が一〇代から二〇代の若年男性であり、一連の暴動が彼らの論理に支えられていた、とする藤野さんの問題提起と現状をどう重ねるのか、という点にヒントはありそうだったが成熟しなかった。

だがこのトークの手探り状況は、山谷とキャバユニの相互参照の試みのごつごつした手触りとよく似ていたと思う。アンダークラスは自身の姿をまだ見出していないのである。

（フリーター全般労働組合／山口素明）

〈べ平連〉その反戦交友録

ピープルズ・プラン研究所主催の連続講座「一九六〇・七〇年代運動／思想史」の第一回が、一〇月二一日に行われた。テーマは「〈べ平連〉その反戦交友録」。同講座は、今年八月の吉川勇一さんの文集刊行を機に企画され、（毎回ではないにせよ）当面はべ平連を軸とした運動史の再発掘を課題とする。近年の大衆運動再興の中で、べ平連への言及や研究も増えつつあるようだが、一面的に整理される傾向もあり、具体的な歴史における人間集団の営為として（つまり運動史的に）改めて掴み直す試みが求められている。

第一回の主発言者は「ヤングべ平連」だったルポライターの吉岡忍さん。吉岡さんは、前述の文集を受けて、吉川勇一さんについて語った。べ平連は「人間の声」を届けようとする運動だった、という理解を踏まえ、吉川さんも「人間」に関心があったにもかかわらず、「政治」ばかりを語り、運動の中で「人間」を表現することが不足していたのではないかと論じた。

その後、文集の編者だった天野恵一さん・有馬保彦さん・松井隆志らとのやりとりが続いた。先の「人間」の表出の

［学習会報告］

奥平康弘『「萬世一系」の研究 第Ⅰ部（岩波書店、二〇〇五年）

「皇室典範的なるもの」への視座』

本書は序章・Ⅰ部・Ⅱ部でできており、今回は序章と第Ⅰ部を読んだ。頁数的にもお値段的にも二回分、という感じではある。ただ、内容的には分けずにやった方が、議論はさらに面白くなったのかもしれない。いや、時間不足の欲求不満になったか……。実際、Ⅰ部だけで大いに盛り上がった。

第Ⅰ部「戦後皇室典範の制定過程――今日的課題の源流」の構成は、一・「皇室典範的なるもの」への拘泥――皇室典範の基本的性格をめぐって、二・「天皇の退位」「女帝」「庶出の天皇」――皇室典範の各論的考察。

一九四五年八月一五日、あるいは一九四六年一月一日の「人間宣言」を機に、「萬世一系」の天皇信仰がコロリと消滅するわけはない。それは支配者層を構成する者たちにとっても同様だ。本書では「帝国憲法」とそれに並ぶ「皇室典範的なるもの」への支配者たちの拘泥ぶりを、新憲法制定とそれに則って制定される新しい「皇室典範」制定の際の、意識・無意識な策略や見解をエピソードとして紹介しながら、あぶり出していく。「皇室法」ではなくなぜ「皇室典範」という名称を継承したか、は典型的な議論だ。そのエピソードの数々が面白い。

奥平のいう「萬世一系の天皇」という一つのイデオロギー体系が、戦後のGHQとの攻防、国会審議等を経る中で、少しずつ譲歩しながらも新憲法の体系にくい込み、現在に継承されている。それを知ることで、現在の「今日的課題の源流」を理解することもできるだろう。

各論の「今日的課題」とは、一〇年以上も経った二〇一六年現在の、支配者層が直面している課題そのものである。そして、別の立場で私たちも同様に直面している。

昨年亡くなった著者奥平が生きていてくれたら、何を語っただろうかと、唸る思いが残る。

次回は一一月二九日（火）、この本の後半部分を読む。

（桜井大子）

弱さに関係して、べ平連の会議等で戦後文学の話題が実はあまり出なかったこと。「ハンパク」や「冷え物」問題におけるべ平連の危機と、しかし吉岡さん自身は現場に立ちあえなかったこと。北ベトナムとの連帯というより、南ベトナム内の抵抗運動への共感だったこと、等々。終盤、参加者とのやりとりで、「名乗った者がべ平連」である以上、様々な立場からのべ平連があることも再確認された。吉岡さん自身のことで言えば、フォークゲリラについて生き生きと語っていたのが印象的だった。

本報告で当日の全てを紹介することはもちろんできない。記録は冊子化予定だ。また、同講座の次回は一二月三日、武藤一羊さんを主発言者にお願いしている。詳細は主催ウェブサイトまたは事務局に問い合わせてもらいたい。

（戦後研究会／松井隆志）

改天日誌

10月8日（土）・9日（日）●山岡強一虐殺30年 山さん、プレセンテ！（集会報告参照）

10月8日（土）●さよなら原発北海道集会

10月9日（日）●泊原発再稼働阻止現地集会

10月16日（日）●差別・排外主義を許すな！10・16ACTION（集会報告参照）

●アンダークラス上等！非正規労働者と戦争扇動―山岡強一虐殺30年「山さんプレセンテ！」アフタートーク（集会報告参照）

10月19日（水）●総がかり行動

10月21日（金）●〈べ平連〉その反戦交友録―吉川勇一の『非暴力直接行動への宿題』を素材に（集会報告参照）

10月23日（日）●やめろ！軍事パレード 行くな！南スーダン 自衛隊国軍化を許さない！10・23朝霞デモ

10月29日（土）●故塩川喜信さんを偲ぶ会

●天皇代替わり［生前退位］状況下のなかで、「観る・読む・再考する」第2回〈グラマ島の誘惑〉

10月30日（日）●高江でのヘリパッド建設強行を許さない！新宿デモ

集会情報 INFORMATION

11月12日（土）●だれの子ども も戦場におくらない

13時30分～／高座渋谷教会（小田急高座渋谷駅）／辻子実／主催：日本基督教団神奈川教区ヤスクニ・天皇制問題小委員会（0463-67-6145）

11月13日（日）●砂川の大地から、とどけ平和の声

9時50分～・砂川学習館（JR立川駅からバス砂川4番下車）／13時10分～・砂川秋まつり広場（学習館はす向かい）／主催：同実行会（042-536-3167）

●天皇「生前退位」と安倍政権を考える

14時～／天野恵一・青山薫・松井隆志／会場・主催：ピープルズ・プラン研究所（地下鉄江戸川橋駅、03-6424-5748）

11月18日（金）●ドイツの戦後70年・第4回「ドイツ民主共和国の政治・社会・文化」

19時～／池田浩士／会場・主催：ピープルズ・プラン研究所

11月20日（日）●生前退位!?皇族解散しろ！天皇制いらないデモ

12時45分集合／14時デモ出発／井の頭公園三角広場（井の頭線井の頭公園駅すぐ）／主催：同実行委員会（042-525-9036 立川テント）

11月20日（日）・21日（月）●JUSTICE for OKINAWA キャンドルアクション

20日18時～・キャンドル行動／21日8時～ビラまきほか／最高裁判所周辺（地下鉄霞ヶ関駅ほか）／よびかけ：「止めよう！辺野古埋め立て」国会包囲実行委員会（090-3910-4140 一坪反戦関東ブロックほか）

11月23日（水）●労災補償しろ！国と東電は健康被害に責任を取れ 被ばく労働を考えるネットワーク集会

13時15分開場／文京区民センター2A（地下鉄春日駅ほか）／海渡雄一・飯田勝泰ほか／主催：被ばく労働を考えるネットワーク（090-6477-9358 中村）

11月27日（日）●オスプレイの横田配備反対！辺野古の新基地も高江ヘリパッドも許さない福生集会・デモ

13時30分～、16時30分デモ出発／福生市さくら会館2F（JR牛浜駅）／望月衣塑子／主催：横田行動実行委員会（042-525-9036 立川テント）

12月2日（金）●安倍靖国参拝違憲訴訟・東京 第11回口頭弁論

14時～、30分前抽選／東京地方裁判所（地下鉄霞ヶ関駅ほか）

12月3日（土）●許すな！軍拡予算 肥らせるな！軍需産業 作るな！米軍・自衛隊基地 討論学習集会

18時～／文京区民センター3C／吉沢弘志・池田五律・杉原浩司・中村利也／呼びかけ：有事立法・治安弾圧を許すな！北部集会実行委員会（03-3961-0212）ほか

12月4日（日）●「天皇賛歌」にうんざり！「女性（的）天皇制」の今とこれから

17時40分開場／北沢タウンホール 第一集会室（小田急ほか下北沢駅）／加納実紀代／主催：女性と天皇制研究会（jotenken@yahoo.co.jp）

12月11日（日）●差別・排外主義に反対するシンポジウム

13時30分開場／文京区民センター2A／安田浩一・師岡康子／主催：差別・排外主義に反対する連絡会（03-3961-0212）ほか

神田川

●私たち天皇より絶対忙しい。（木菟）

●今日は疲れたビ～。（鰐）

●あたしは少しだけみなよりヒマ？（蝙蝠）

●小集会で話をして、作業へ。やっと「代替り」状況下の討論が各地でスタートしている。ガンバロウ！（熊）

●忙しかろうと、ヒマだろうと、ビールだビールだ。（貘）